尋常小學讀本文部省

卷三

K1
M
1002



尋常小學讀本

文部省

卷三

モクロク

一　サクラ……一
二　コレガ　スンデ　カラ……三
三　ノアソビ……六
四　ワタクシ　ノ　ウチ……十
五　ノミノ　スクネ……十三
六　ヒバリ……十七
七　なぞ……二十二
八　うしとら……二十三
九　こうま……二十五
十　タケ……二十七
十一　タウエ……三十一
十二　ほたる……三十四
十三　がくかう　へ　もつて　いく　もの……三十七
十四　うと　からす……一
十五　ミギト　ヒダリ……六
十六　四方……十三
十七　ほしとり……十七
十八　かへる……二十二
十九　かへると　くも……二十三
二十　ハイ　今　スグニ……二十五
二十一　虫ボシ……二十七
二十二　うみ……三十一
二十三　かひ……三十四
二十四　ウラシマ　ノ　ハナシ　(一)……四十
二十五　ウラシマ　ノ　ハナシ　(二)……六十九

さくら



一　サクラ
ツツミ　ノ
ヲカ　ノ　上　ニモ、
一メン　ニ　サキマシタ。
サクラ　ノ　ハナ　ガ
マコト（北洋ノ言也。）ニ　ウツクシイ
デハ　アリマセン　カ（ヌケタ。）
ヒラヒラト　カゼ　ニ
チル　ノ　モ
マタ　ミ（ヨ）



日本
うつくしい

ゴトクデス。

ムカフノ山ニハ、

ウ（以上近所ヲイフ）

アレニモ白ク

サクラノ木ハ、

コンナニタクサン

日本ノサクラノ

ハナデス。

ユキガフツタヤウナ

トコロガ

ハナデス。

（遠イ）

ヨソノクニニハ、

アリマセン。

（多クノトコロニテモ）

アツテモ、

ヤウナウツクシイ

ハナハサキマセン。

（咲キタイトキノバカリデス）

はな

やま

ハルウシ　クラ　クツ

本ヲ　イシ　クサ

ラヘヨンデ　ヰマシタ。　歌目録ニ奇抜ナリ。

ゾイノ　ハナガ、　マダ　コレガ　ヰ

「マルサヨ　サン、　ノ　アタタカイ　日ニ、　マル

サヨ　ガ　ニモ　山　ニモ　ワタク　ノ

尋三

シドモ　ノナカニ　マガ　タクサン　サイテ　ヰマス。デテ　キテ、イッショ　ニ　アソビマセン　カ。」



「勉強ガ　コレガ　スンデ　カラ　イキマス　カラ　マッテ　イテ　クダサイ。」ト　ミムキ　モ　シナイデ、ヒタスラ　ニ　ヨンデ　ヰマス。

小とり

コンドハウツクシイ小トリガマド
ノソトカラノゾイテ、
「マリツサヲサンソンナニウチヘバカリイデテ、
マサヨヤウタヒマセウ」。
「コレガスンデモシナイデ、
スコシタツテオサラヒガスミマシタ。

尋三

ソコ　ヘ　トモダチ　ガ　サソヒ
タ　カラ、ヨロコンデ　イツシヨ
ヘ　アソビ　ニ　イキマシタ。

はなさく。

三　ノアソビ　とり　なく。

吐蕃ヲ三章ヨリ後ル

マサヲ　ト　トモキチ　ト　オハナ
デ　ノハラ　ニ　アソンデ　ヰマス。
ノハラ　ニハ、アヲイ　クサ　ノ
中　ニ、ア

きいろ



カヤ、キイロヤ、ムラヽ
サキヤ、イロナハヽ
ナガサイテ
トモキチ「コレカラ
ツミマセウ。
レンゲヲ
マサヲサン
ポポヲオツミナサヽ

尋三

前三者、黄、紫ノ
有スル事物多クハ当レ
ト拳ゲテ広ク其色

撮ルト云フ動作ヲ有ス。

同ジ撮ルデモ手ニ把ツテ引キ寄セル意モ
モ有ツテ多クハ此ノ意ヲ
て

たくさん

イ。
」

オハナ「ソレデハ　ワタクシ　ハ　スミレ　ヲ　ツミマセウ」。

マサヲ「ボク　ハ　モウ　コンナ　ニ　ツミマシタ」。

トモキチ「ボク　モ　モウ　テ　ニ　一パイ　ニ　ナ

オハナ「スミレ　ハ　タクサン　ナイ　カラ、　マダ　リマシタ」。

花男ニクタトノイフコトカ左ノ件ヨリ考ヘル。

むらさき

ソンナ　ニ　ツメマセン」。
シテ　カラ　三人デ　ツンダ　ノ　イツ＝
アカ　ト　キイロ　ニ　シテ、ハナタバ　ヲ　コシラヘマシタ。
ロツテ　キレイ　ト　ムラサキ　ト　三イロデス。

あたたかい日　あさい川
たかい木　くろい土
小さな　むし　が　とんで　きました。

ねえさん
一人
へいたい

大きな　うま　が　はしつて
四　ワタクシ　ノ　ウチ
ウチ　ニハ　ネエサン　ガ　一人、
ガ　三人、　オトウト　ガ　一人
ヅツ　アリマス。　一バン　上　ノ
ハ　イマ　ヘイタイ　ニ　イサン
エサン　ハ　コノ　ヘ
オヨメ　ニ　イキマシタ。

おとうと
いぬ
にいさん

ワタクシ　ハ　オカアサン　ノ　イトヒツケ　ヲ
ヨク　キイテ、イモウト　ノ　モリ　ヲ　シタ。
リ、トオツカヒ　ニ　イツタリ　シマス。オトウ
ト　ハ　犬　ガ　イツモ　ブチ　トスキデ、イツモ
アソンデ　ヰマス。オトウサン　ヤ　オカアサン
ヤクバ　カラ　タンボ　ヘ　イキマス。ウチ　ノ
人　ガ　ミンナ　デル　トキ　ニハ、

尋三

おるすゐ

オバアサンガオルスヰヲシマ
バンノゴハン
デイサンハイロイロナオモシロ
シヲキカセテクダサイマス。

へやの中まであかるくなりました。

にはのまつの木の上へ月

ちから

だれ

ムカシ ニハトリ ハ トヤ デ ネテ ヰマス。

ラ イヌ ハ オキテ、ナイテ ヰマス。

ツノ フ 五 ノミ ノ スクネ

モ、フ ホド ケハヤト イフ チカラ

ヤ、シカ ノ ツヨイ 人 ガ アリマシタ」

ツノ デモ ヲッテ シマヘ ウシ ノ

マケタ コト ヲ ハ アリマセン。

中
よわい

それを
子
のみのすく
ね

「日本中ニハ　ヨワイ　モノ　バカリ　デ、ジブン　ノ　アヒダ　ト、人　モ　ナイ」。

イバツテ　ヰマシタ。

ヲ　天子　サマ　ガ　オキキ　ニ　ナツ　ハ　一　ヒ

ソレ　ノミ　ノ　スクネ　ト　イフ　人　デ、

テ、　ヲ　オトラセ　ニ　ナリマシタ。

マフ　ノ　トホリ、　ケ

ケハヤ　ハ　ソノ　ナ　ノ　コ



トガマコトニハヤカツタノカシラ、ナニカ人デシタスクネモチカラガツヨクテ、スバシコイケラレマセン、スキヲネラツテ、タツタ一ケデス。シ〃

ハヤ ヲ ケタフ シマシタ。

ミテ キタ 人 ハ ミンナ 一ド ニ テ

ヲ タタイテ ホメマシタ。

「おれ（おのれ） より ちから の つよい 人 は あるまい」。

と いつて、けはや が じまん を しま〻した。

のみ の すくね には ま〻けました。

それで けはや は わらはれて、

ふく

おもしろい

上

こゑ

すくね　は　ほめられました。

六　ヒバリ

アタタカイ　カゼ　ガ　ソヨソヨト　ムギノ

ホ　ノ　上　ヲ　フイテ　ヰマス。　ヒバリ　ガ

オモシロサウ　ニ　サヘヅツテ　ヰマス。

ゴラン　ナサイ、　マタ　アソコ　カラ　モ　一ピキ

キ　ト　上リマシタ。　サヘヅリ　ナガラ　ダンダン

タカク　上ツテ　イキマス。　モウ　コヱ　バカ



ス。ニ　キ　テ　ト、

リ　キコエテ、スガタ

ハ　ミエマセン。　サヘ〃

サヘヅル　ダケ

イマ　ニ　マタ　オリ〃

キマセウ。　ト〃　オリル

ニハ、オチル　ヤウ

ハヤク　オリテ　キマ〃

ひばり
おりません
ゆふがた

ヒバリ　ハ　オリ　トキ　ニハ、ケツシテ
ス　ノ　アル　トコロ　ヘ　ハ　オリマセン。
ケレドモ　上ル　トキ　ニハ、ス　カラ　スグ
トビタチマス。
ユフガタ　ニ　ナリマシタ　ガ　オヤドリ
リテ　コナイ　トキ　ニハ、子ヒバリ　ハ
ノ　中　デ、ドンナ　ニ　マツテ　ヰル
デセウ。

ひばちが一つ。

ふえが三本。

子どもが五にん。

ゆのみが二つ。

名本が四さつ。

あいうえお	かきくけこ	さしすせそ
たちつてと	がぎぐげご	ざじずぜぞ
だぢづでど		

尋三

なにぬねの	はひふへほ	まみむめも	やいゆえよ	らりるれろ	わゐうゑを	ん

ばびぶべぼ	ぱぴぷぺぽ

尋三

わたくしには　あしもありません。　手もありません。　まいけれども　のやうに　まんまるるますが、　うごかずに　ありません。　のではありません。　だれにも　できることや、　かさね

牛

る　こと　は、どうして　でき　ません。　私
は　そと　が　かたく　て、中　が　やはらか
です。かたい　もの　に　あたれば　こはれ　ま
す。私　は　なん　で　せう。

八　うし　と　うま

牛　には　つの　が　あるけれども、うま　に
は　ありません。うま　には　たてがみ　が
あるけれども、牛　には　ありません。

うま　は　からだ
がう　ございます。
て、足　が　ほそくて、
牛　は　からだ　が
め　は　二つ　に
の　は　われて　ゐます
と　が　おそう　ございます。
牛　は　力　が　つよいけれども、
より　よわいけれども、　はしる　こと　が　は

やう　ございます。

どちら　も　たいそう

つ　で　ございます。

九　こうま

はいしい、

はいしい、

あゆめ　よ、　小馬。

山　でも、　さか　でも、

ずんずん　あゆめ。

尋三

走

おまへ　が
すすめば、
わたし　も
すすむ。
あゆめ　よ、あゆめ　よ、
足おと　たかく。」
ぱかぱか、
ぱかぱか、
走れ　よ、小馬。



けれども　いそいで

おまへ　が　ころがして　つまづくと　まいぞ。

走れ　わたしも　ころぶ。

よ、　走れ　よ、

ころばぬ　やう　に。

十　タケ

四五日　マヘ　ニ　アタマ　ヲ　ダシタ　タケ

尋三

ノコガ、モウコンナニノビテ、私ノ
セイトオナジクラヰニナリマシタ。
コレカラ二三日タツタラ、マダ
タカクナリマセウ。ダンダンノビル
タケノカハガオチテ、ト、



リツパナ　竹ニ　ナリマス。アタラシイ
竹　ハ　アヲアヲト　シテ、マコトニ　ウツク
シイ　モノ　デス。
竹　ハ　イロイロナ　ヤク　ニ　タチマス。
ダイ一　タケノコガ　タベラレマス。タケノ
カハ　ハ　モノ　ヲ　ツツム　ノ　ニ　ツカ
ハレマス。　フデ　ノ　ヂク、モノ　サシ　フエ
ツヱ　ザル　カゴ　ナド、竹　デ　作ツタ　モ

ノ　デ　作リ　ソノ　ケ　マス。　モノ

ガ　タクサン　アリマス。
コシラヘ、　タコ　ノ　ホネ　モ　竹
タ　ホカ　竹　ノ　スダレ　モ　アリ、　竹
カキネ　モ　アリマス。　タル　ヤ
ノ　タガ　ガ　カケテ　アリ

ホシザヲ　ニモ、　コクキ　ノ　サヲ　ニモ、

センドウガ舟ヲヤルサヲ二モ、竹
ヲダマツカヒミチハマ＝
ノツカヒアリマス。
例ヲデル、
十一タウヱタクサンタイテ、田ノ水ガタ＝
アメガフリツヅイテ、田ウヱ
クサンニナリマシタ。ドコデモ
ガハジマツテヰマス。
馬ニマグハヒカセテ、田ヲカキ＝

尋三

ナラシテ　斗ル　人モ　ア〃
リマス。　ナハシロ　デ　ナ〃
ヘヲ　トツテ　斗ル　人ガゴ　ニ
モ　アリマス。　ナヘカラ　ハシツ〃
ナヘヲ　入レテ、　ヨク　アリマ〃
テ　イク　人モ　アリマ〃
ス。　コドモ　ガ　ニ三人
アゼ　ニ　タツテ、　ナヘ

女

ヲ　田　ノ　中　ヘ　ト　ナゲ入レテ　ヰマス。
ナ　ヘ　ヲ　ウヱテ　ヰル　女　ハ、マ
サ　ヲ　カブツテ、アカイ　タスキ　ヲ　カケ
テ、コヱ　ヲ　ツロヘテ、ウタツテ　ヰル
アノ　コヱ　ウタ　ヲ　オキキ　ナサイ。
「コトシ　ハ　ホウネン、
ホ　ニ　ホ　ガ　サイテ、
ミチ　ノ　小グサ　モ

ゴラン　ナサイ、モウ　アノ　ヒロイ　米　ガ　ナル。」

ハンブン　バカリ　ウワリマシタ。　イマ　田　ガ

アノ　ナヘ　ガ　ノビテ、アヲイ　タノミ　ニ

シイタ　ヤウ　ニ　ナリマセウ。

あ　十二　ほたる

る　ばん　まさを　は　はは　と

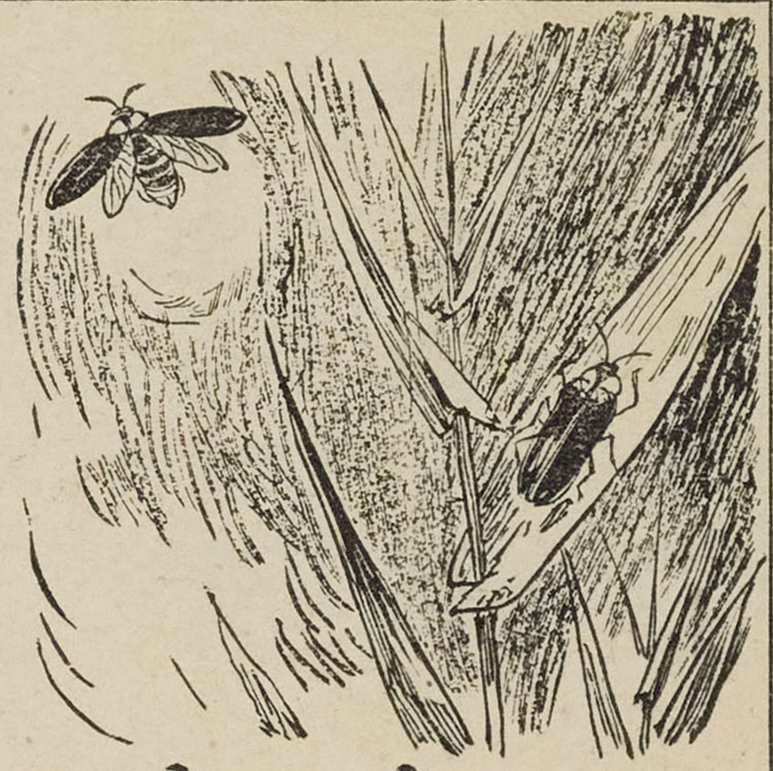
に　よそ　から　かへつて　きました。

尋三

みち　で　ほたる　を　一ぴき　つかまへて、
母　から　かみ　を　もらつて　つつみました。
あをい　ひかり　が　かみ　の　上　から　す
いて　みえます。
うち　へ　かへつて、
ちち　に　みせよう　と
したら、光　が　みえません。
「おや、にげた　の　か　しらん。」
と、いそいで　かみ　を　あけて　みる　と、

尋三

父



ほたるは　やはり　中にゐ
ます。　ません。　けれども　光つてはゐ
まさを　は　ふしぎさう　に、
「どうして　もう　光らない　の
と　いひます　と、　父　は
「ここ　が　あかるい　から、　みえない　の
です。　くらい　ところ　へ　はなして　ごら

と　いひました。父　の　いふ　とほり、そと
へ　はなしたら、あをく　光り　ながら、しづ＝
かに　とんで　いきました。
七じ　が　なりました。
十三　がくかう　へ　もつて　いく　もの
は、さあ、これ　から　が＝
くかう　へ　行きませう。　がくかう　へ　もつ＝
て　行く　もの　は、みんな　この　ふろしき

の中につつんであります。ほかに
だだだいじなものが三つあります。
だいいちには目です。これで本の
中のじやゑや、せんせいの見せ
てくださるいろいろなものを見る
です。

だいにには耳です。これがなければ、
せんせいのおつしやることや、みんな

の言ふことがわかりません。
私はよるよくねむりますから、目
はいつもはつきりして ゐて、
えます。耳もよく見〃
やうなことはきこえて、き
だい三にはロでです。なにをきかれて
も、このロではつきりこたへます。け〃
れどもそのほかによけいなことは

言ひません。

十四うと からす

うが 川の 中で さかな

をとつて ゐました。今 もぐ〃

とつて ゐるまもふ と、すぐ〃

に 一ぴき くはへて、でて き〃

ます。それ を たべる と、また

すぐに もぐりま す。見て ゐる





うちにまた一ぴき くはへて、出ます。それをから見てゐて、「水の中へはいつたら、どんなちだらう。一つやつて見よう」と、川の中へはいりました が、がぶがぶと水を

のんで、とうとうしんでしまひました。

うのまねをするからす、水におぼれる。

十五　ミギ　ヒダリ

ミナモト　ノ　ヨシイヘ　トイフ　タイシヤ＝

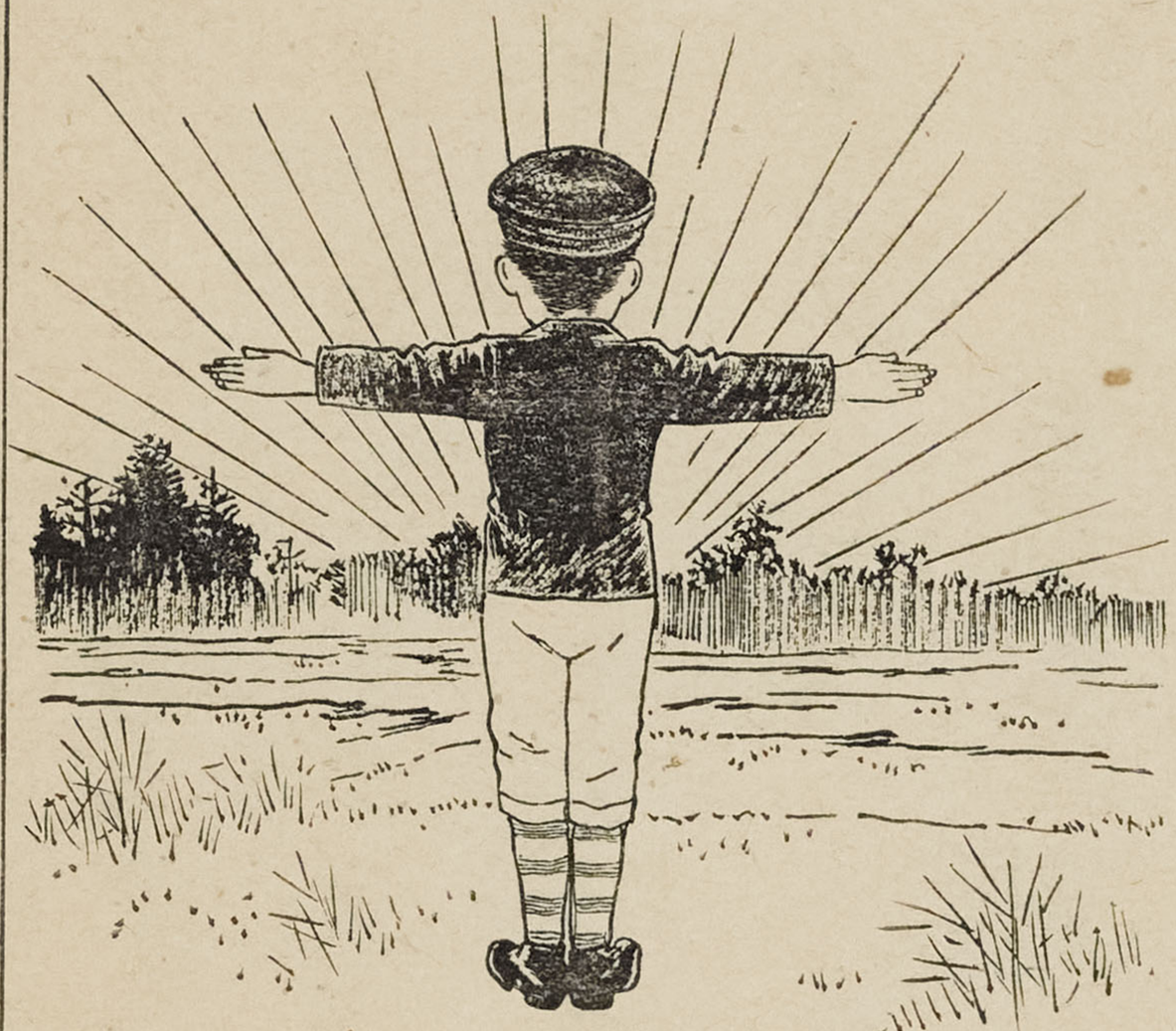
ウガ　イクサ　ニ　行ツタ　トキ、ユフハン

ニハ、ケライ　ノ　人ヲ　右　ト　左　ニ

ワケテ　スワラセマシタ。ソノ　日　イク＝

尋三

サニテガラ
ノ方ニナラベテ、アマリハタラキノ
ナカツタモノヲ左
タノデス。
ダレモ右ノ
ルノハイヤ方ノナカマ
フンパツスルヤウニナリマシタ。ソレデ
イツデモイクサニカツタトイフコト



デス。

十六　四方

アサ日ノ上ル方ガ東

日ノ入ル方ガ西デス。

アサ日ニムカツテ、手ヲヒロゲテゴラン下サイ。

右ノ手ノ

南　北　男

ス　方　ガ　南　デ、
方　ガ　北　デス。
東　ト　西　ト　南
イヒマス。

十七　ほしとり

ある　ばん　一人　の　男　が　そら　を　む＝
いて、　ながい　さを　ふりまはして　ゐま＝
した。　そこ　へ　ともだち　が　きて、

左　ノ　手
ノ　サス
四方　ト

尋三

「おい、なにを　して　ゐる　の　だ。」

と　きく　と、

「あまり　ほし　が　きれい　だ　から、

三つ　はたきおとさう　と　思ふ　の　だ。」

と　こたへました。　ともだち　は

「ばかな　こと　を　いふ。　そんな　ところ

で　さを　を　ふりまはしたつて、　どうして

とどく　もの　か。　それ　より　は　やね

の上へあがつてはたけ。」

といつてわらひました。

十八かへるは、大きに

かへるにをかれるときには、

きな目をして、手をついて すわつて

て ゐます。

とんぼなどがまはつてゐます。

あたまの上を とび

まはつても、見むきもしません。小さな

尋三

虫がまへへくると、ぱくつと　くつ〻

て、へいきなかほをしてゐます。

思ひだしたやうに　ざぶん〻

と水の中へとびこみま〻す。

水の中中では　あと足で水をかきながら、あちらこちらへおよぎまはります。

又さかさまになつて、下

へ　にもぐつて、しばらく　たつ　と、ひとりで
出て　きます。
水　うかぶ　やうに　して、水　の　上　へ
うかんで　ゐる　ことも　あります。
人　の　足　を　のばして、ぼんやり
くつろいで　ゐる　ことは　水　の　中　に　なが〃
や　犬　など　は　できません。
ふだん　居る　こひ　や
水　から　出る　と、しんで
しまふ　など　は

尋三

しまひます。

かへるは水の中にも、

にもすむことができるの上

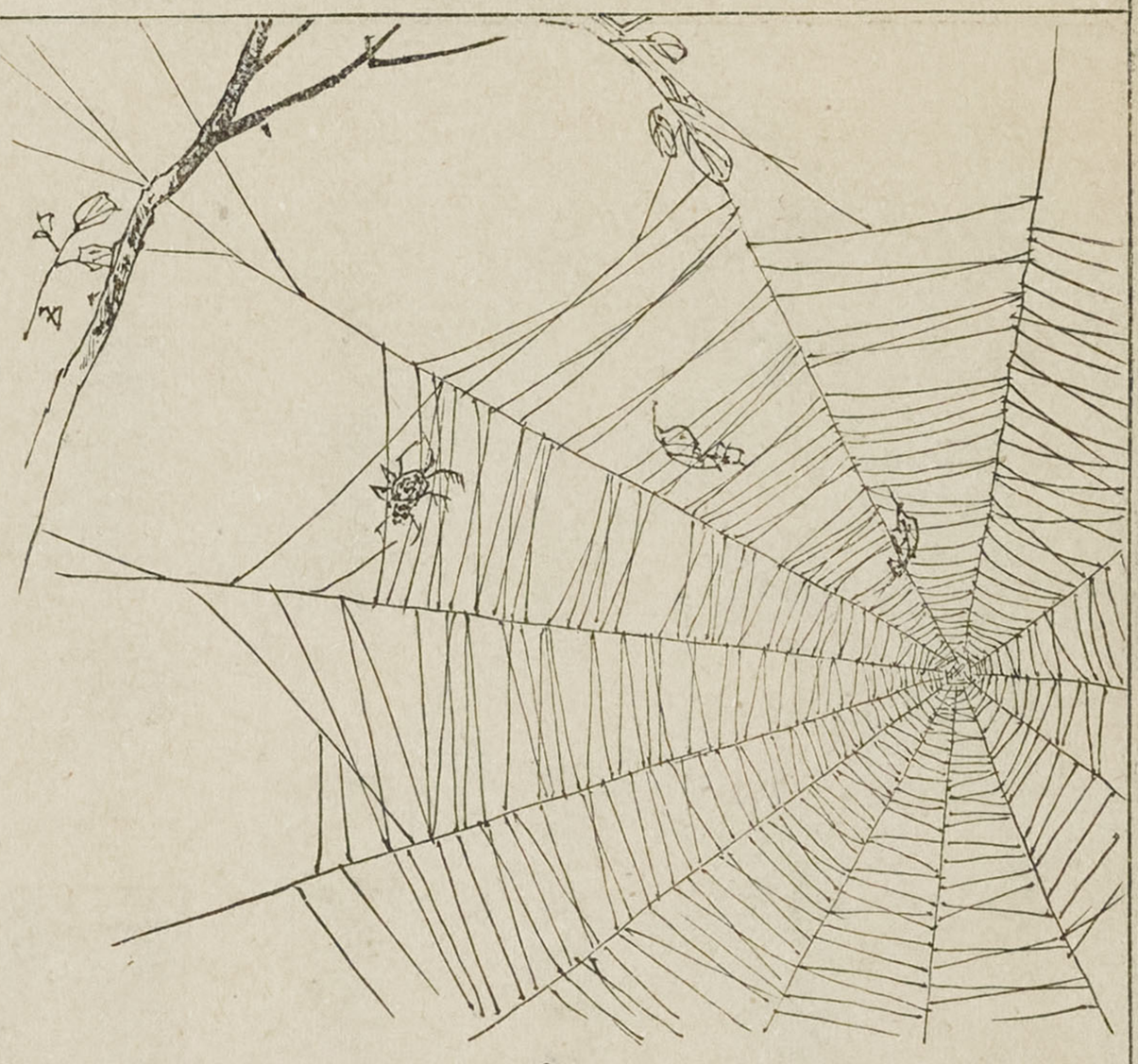
しだれやなぎにも、十九かへるとびつくもです。

とんではおち、

おちてはとび、

おちても、
おちても、
またとぶ
ほどに、
とうとう　やなぎに
とびつい た。」
かぜ　ふく　小えだに
すを　はる　小ぐも、





とうとう　小さいはつては　きれ、

すでに　きれては　はり、

二十　ハイ　きれても、きれて　また　はる

今　スグニ　ほどに、

「出来えだ。

をはつた。

ハツ　ニ　ナル　女ノ子　ガ　アリ
ヲ　言ヒツケラレテ
「ハイ、今　スグニ。」
ト　イヒ　ナガラ、ナカ
トリカカリマセン。
「モウ　ゴハン　ダ
オイデ　ナサイ。」
ト　ヨバレテ　モ、
カラ、



マシタ。　何

トハ「イ、今スグニ」。

トハ「イツテ、ナカナカイハレテモ、スグニ」。

トハ「オサラヒスグニハナサイ」。

アルト「早ク、早ク」。

ハ「早ク、日母ガデス。

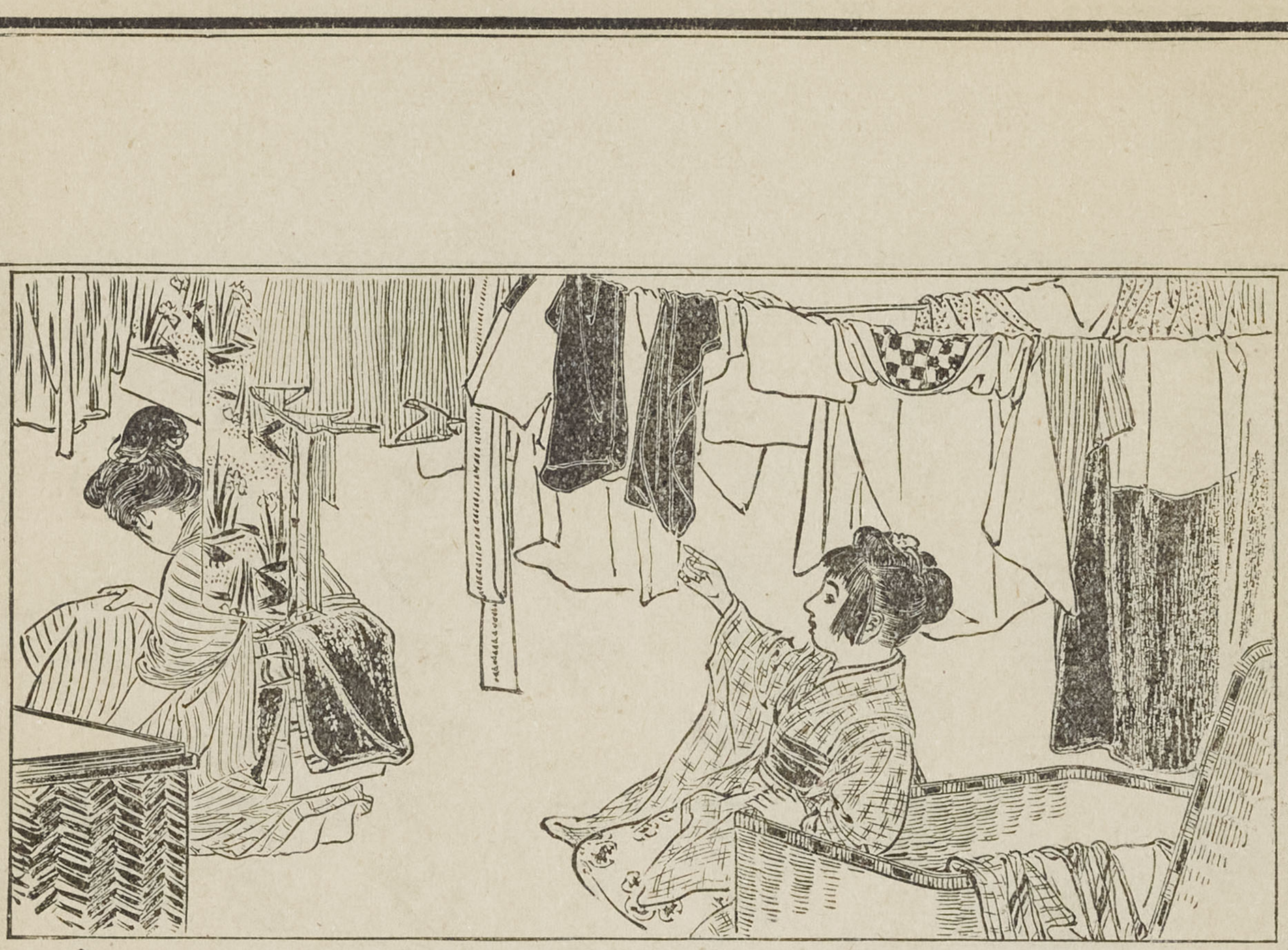
行キマセン。

ト ヨンダ ノ ニ、イツモ ノ ト ヨリ、
「ハイ、今 スグ ニ」。
ト イツテ、スグ ニ ハ キマセン デシタ。
ソノ ウチ ニ、ト ナリ ノ ネコ ガ ダイ
ジナ キンギヨ ヲ トツテ、ニゲテ 行キマ
シタ。

二十一 虫ボシ

今日 ハ ウチ ノ 虫ボシ デアス。ザシキ

尋三



ノツウホ、モノマカ

ウチニイクスヂモ

ナヨハツテ、ウチヂユ〃

ノ人ノキモノガ

アハセテアリマス。

ワタイレモ、ヒトヘモ〃

モ、カタビラモ〃アリ〃

トハ〃

ノデ〃

ス。コノ赤イ ジユバン ハ イクラモウト ノ
デス。アソコ ニハ オトウサン チヤイ〃
ロノ オビ ガ アリ、コチラ ニハ オカ〃
アサン ノ モンツキ ノ ハオリ ガ アリ〃
マス。

私ガ ヲバサン カラ イタダイタ ムラサ〃
キ色ノ ハオリハ、イツマデ タツテ モ、
色ガ カハリマセン。

私ガ キヨネンマデ キテ ワタイ
レハ、ユキモタケモ ミジカク ナツ
テ、モウ キラレマセン。

うみの水が 海岸ヲ迎フ
もつづいて ゐます。

青青と して、どこ までも
青ぞらと いつしよに なつて ゐる やう
に見えます。



今日はなみがおだやかで、舟がたくさんおきへ出てゐます。ほをかけてゐるのもあり、かけてゐないのもあります。くろいけむりを出して走つ

ていくきせんもあります。左の
にはなればなれになつてゐるのは、右の
魚をつつでゐる舟です。方は、
に五六そうかたまつてゐるのは、今
あみをおろしてゐるのです。
あのあみをだんだんはまべへひき
よせてくると、大ぜい
女や子どもになつてひきあげます。」

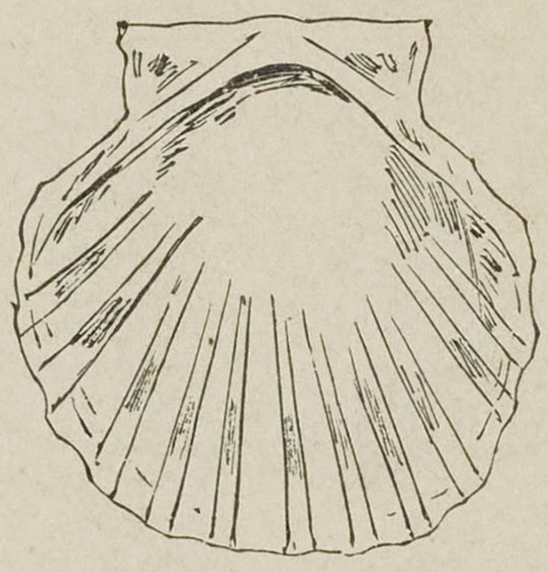
貝　石

はまべのまつの木の下へ行つて見ませう。あそこにはうつくしい小石がたくさんありますす。

二十三　かひをぢさんのおみやげに貝をこんなにたくさんいただきました。

みんなこんなめづらしい貝ばかりです。こんなに大きいのも、こんなにちいさいのもあります。

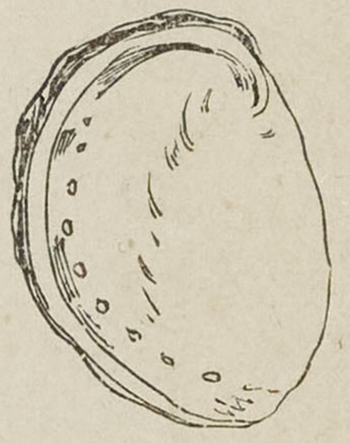
合







二つ合ふのもはまぐりのやうにありますが、ふかいつぼのかたちになつてゐるのもあります。又あはびのやうに、一つでひらたいのもあります。









ごらんなさい、この貝がら
はかたつむりのやうに、
おもてにうづまきがあります。
そのうづまきに、右から左へまはつてゐる
のと、左から右へまはつてゐるのと、ふたいろ
ありますす。私はをぢさんに、

買賣

「どこ　で　こんな　に　たくさん　おひろひ　に　なりました。」

と　きき　ましたら、

「いいえ、これ　は　ひろつた　の　で　は　な　い。貝ざいく　を　賣る　みせ　で　買つて　きた　の　です。」

と　おつしやいました。

二十四　ウラシマ　ノ　ハナシ　(一)

ムカシ　ウラシマ太郎
ト　イフ　人　ガ　アリ＝
マシタ。
アル　日　ウミベ
テ　見ル　ト、子ドモ
大ゼイ　デ　カメ　ヲ
カマヘテ、オモチヤ
ニシ＝　ツ＝
ハ　出＝
テ　キマス。　ウラシマ



尋三

カハイサウ ニ 思ツテ、子ドモ
カメヲ 買ツテ、ウミ ヘ ハナシテ ヤリ
マシタ カラ ソノ
ソレデ ツリ ヲ タツテ、ウラシマ ガ ウ
ミベ シテ ヰル ト、大キナ
カメガ 出テ キテ、
「ウラシマ サン、コノ アヒダ
タスケテ クダサツテ アリガ トウ ゴザイマシタ。オレイ ニ
リユウグ

ウ
セ　ト
ナカ　ヘ　ツレテ
イヒマス。
ウラ　シマ　ガ　ヨロコンデ、カメ　ニ
ダン　ノ　中　ヘ　シヅンデ　行ツ〃
テ、　マモナク　リ
マシ　リュウグウ　ノ　門
タ。

「行ツテ　アゲマセウ。私　ノ
ナサイ。」

イナ　オヒメサマ
タ　ガ　居テ、ウラシマ
ナ　ノ　ヲ　タイ
ソビ　ニ　ゴチソウ　ヲ
ウラ　シタリ、サマザマ
ラ、　ヲ　シテ　見セマシタ。
テ、　モシロクテ　タマリマセン　カ〃
マシ　リユウグウ　ノ　オキヤクサマ　ニ　ナツ〃
タ。　ウチ　ヘ　カ　ヘルノ　モ　ワスレテ　キ〃

二十五　ウラシマ　ノ　ハナシ　(二)

ウマイ　ゴチソウ　モ　毎日　タベル　ト、シ＝

マヒ　ニハ　イヤ　ニ　ナリマス。　オ

アソビ　モ　毎日　見ル　ト、シマヒ　ニハ　ア＝

キテ　キマス。

ソノ　ウチ　ニ　ウラシマ　ハ　ウチ　ヘ　カ＝

ヘリタク　ナツタ　カラ、　アル　日　トヒメ

ニ、

尋三



「イロイロ　オセワ　ニ　ナッテ、
アリガタウ　ゴザイマス　ガ、ア‖
マリ　ナガク　ナリマス　カラ、
モウ　イトマ　ウチ　ヘ　カヘリマセウ。」
トイヒマシタ。
オトヒメ　ハ
「ソレ　ハ　マコトニ　オナゴリ‖
デ　ゴザイマ‖



ガ、ソレデハ　オワカレ

ノ　シルシ　ニ　コノ

ハコ　ヲ　上ゲ　マ〃

ウシマセウ。　シカ〃

シ　ケムリ　ノ　ツシテ　フ〃

タ　ヲ　オアケ　ナ〃

サイマス　ナ。

ト　イツテ、タマテ〃

尋三

バコ　ト　イフ　リッパナ　ハコ
マシタ。
ウラシマ　ハ　ハコ　ヲ　モラッテ、マタ　カヘ
メノ　セナカ　ニ　ノッテ、海　ノ上　ヘ
出テ　来マシタ」。ウチ　ヘ　カヘッテ　見ル
ト、オドロキマシタ、父　モ　母　モ　シンデ
シマッテ、ジブン　ノ　ウチ　モ　アリマセン、
トモダチ　モ　ミンナ　ナクナツテ、知ツ

テ　ダ　ア　イ　ア　出　ナ

斗　ル　モノ　ハ　一人　モ　アリマセン。

カ　カナシクテ　カナシクテ　タマリマセン。

ナツタ　カラ、　オトヒメノ

コト　モ　ワスレテ、　タマテバコ

見ル　ト、　中　カラ　白イ　ケムリ　ガ

ニハカニ　オデイサン　ニ

ナツテ　シマヒマシタ。

いろはにほへとちりぬ
るをわかよたれそつね
ならむうゐのおくやま
けふこえてあさきゆめ
みしゑひもせす

をはり

国立国語研究所
1002535050

明治四十三年一月廿一日翻刻印刷
明治四十三年二月廿八日翻刻發行

著作權所有

尋常小學讀本 卷三
定價金七錢五厘

明治四十三年二月一日
文部省檢查濟

(二五七一)

發賣所
東京市日本橋區新右衞門町十六番地
株式會社 國定教科書共同販賣所

著作兼發行者 文部省

翻刻發行者 東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社
代表者 原亮一郎

印刷者 東京市下谷區二長町一番地
河合辰太郎

印刷所 東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社
凸版印刷株式會社代表者

.0
24
5050